宇都乃宮驗動記　全

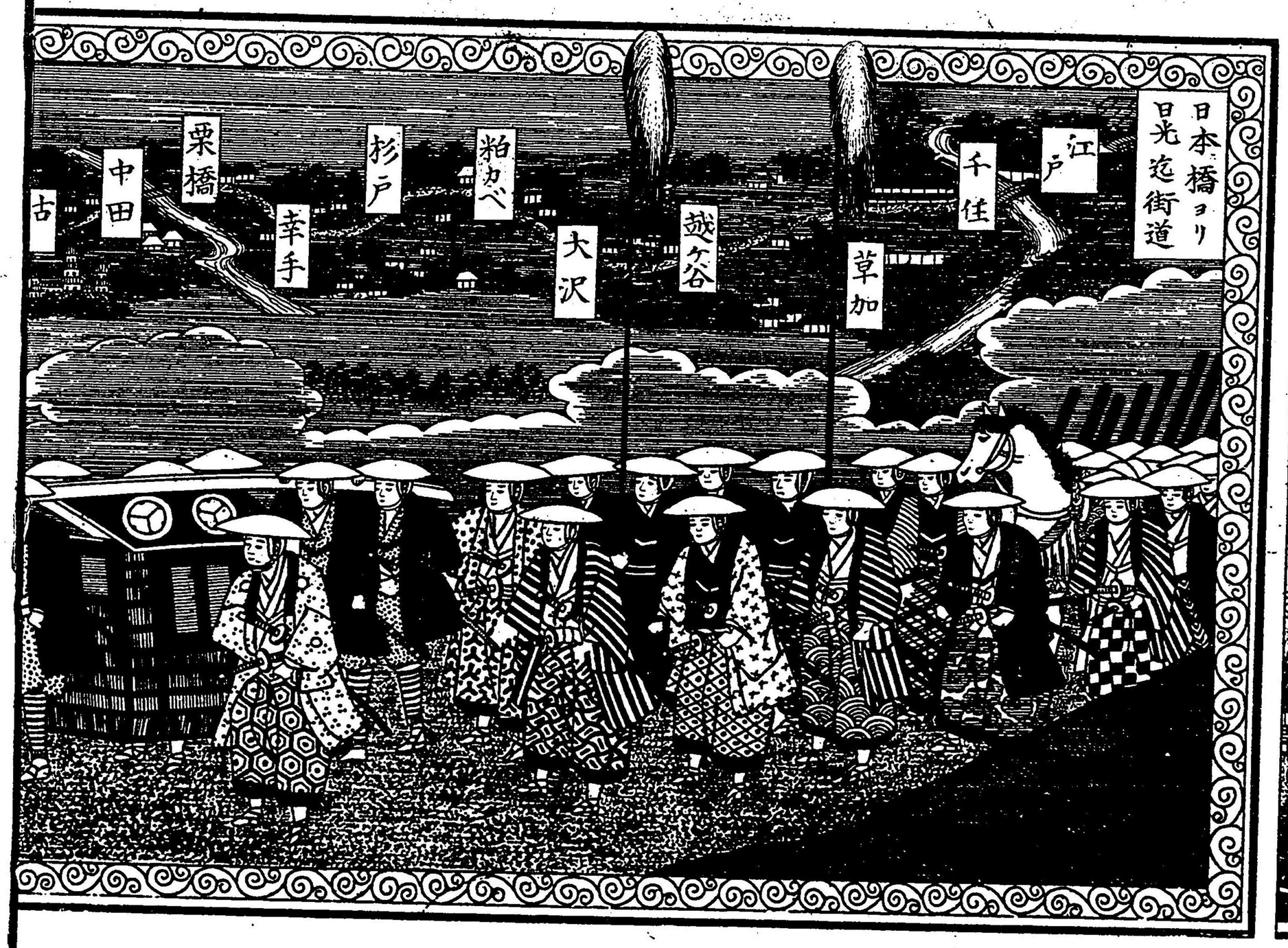
特60
138

特60
138
№1065/23

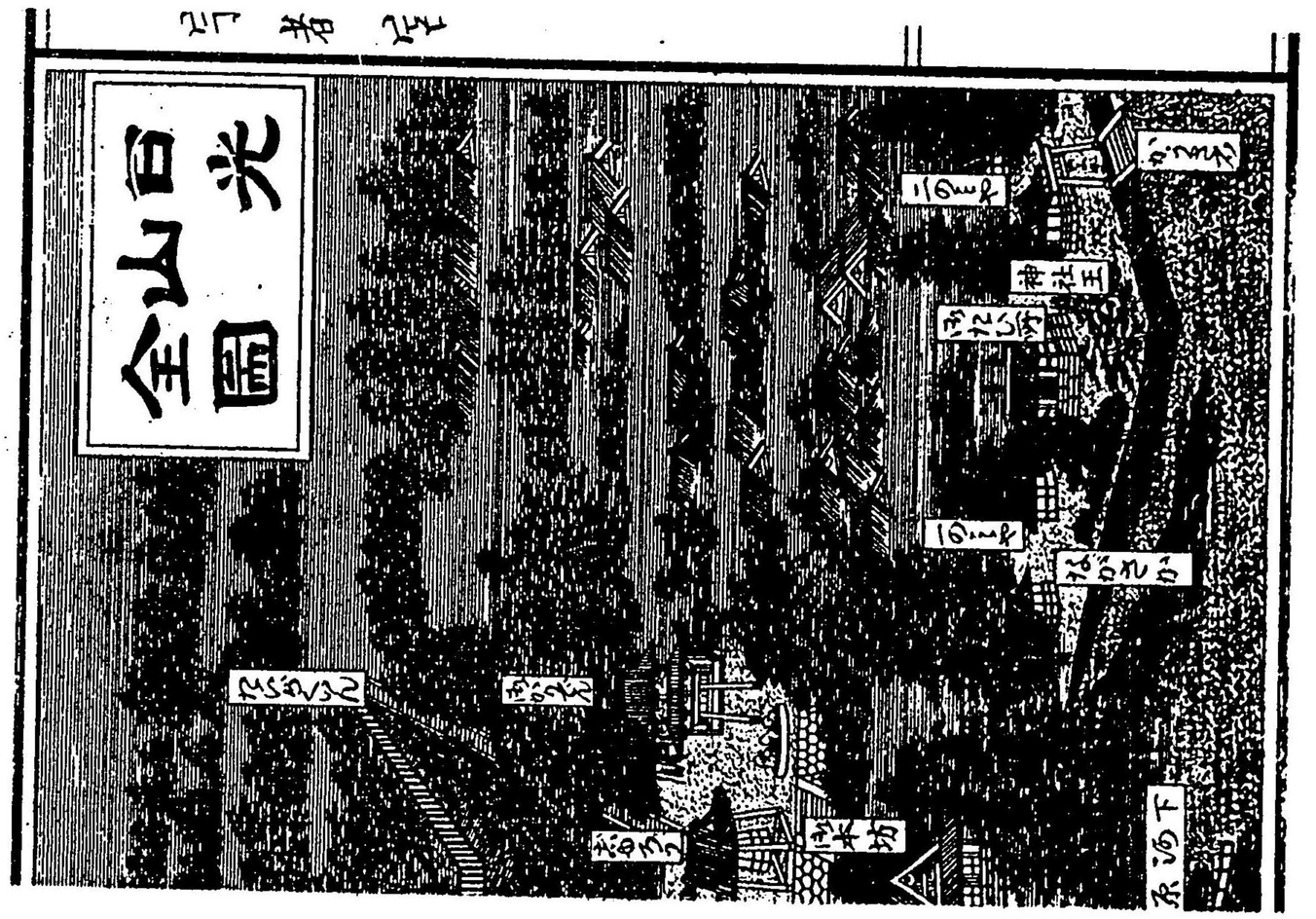
梅堂國政画

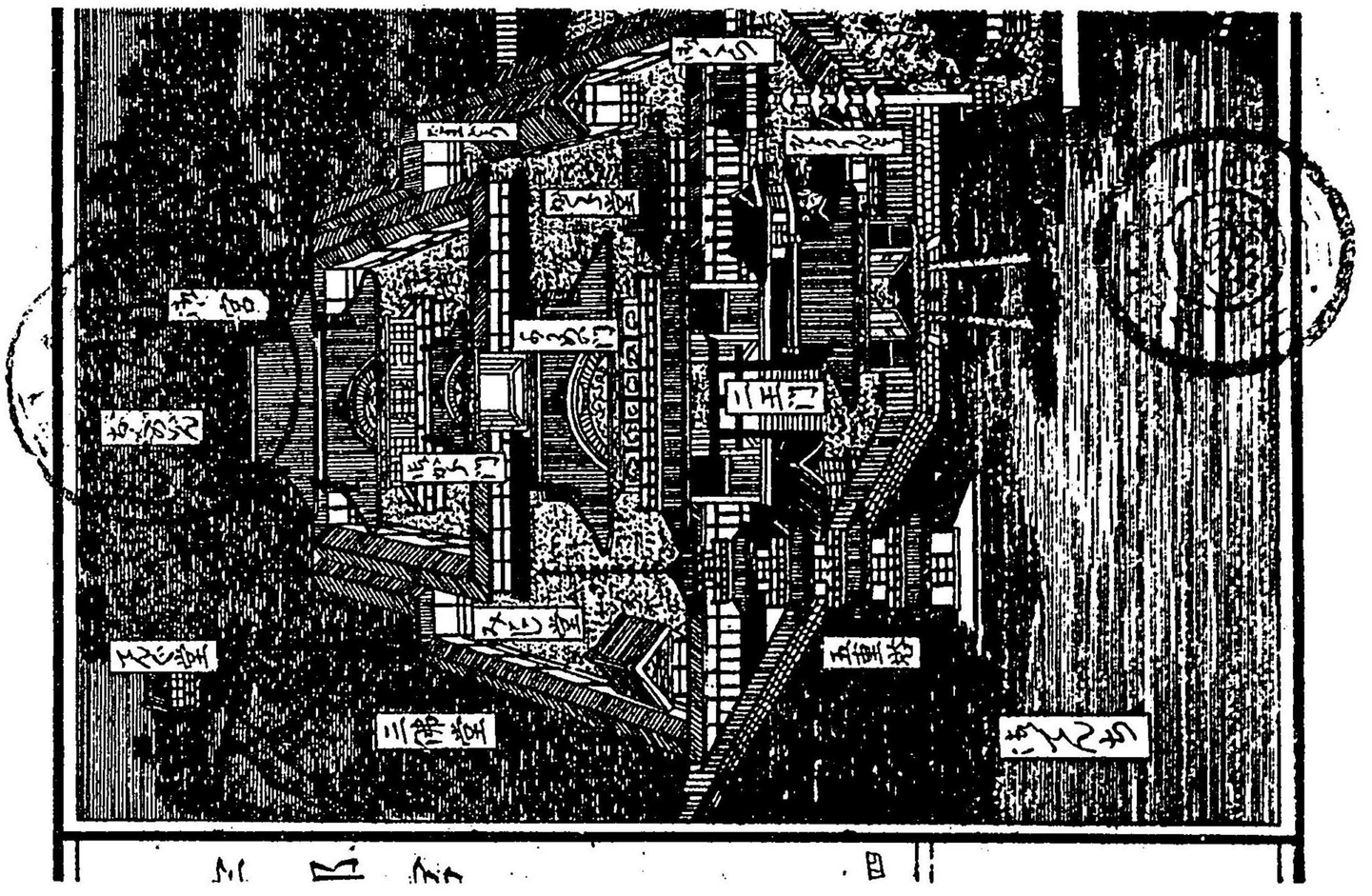
宇都宮騒動記 全

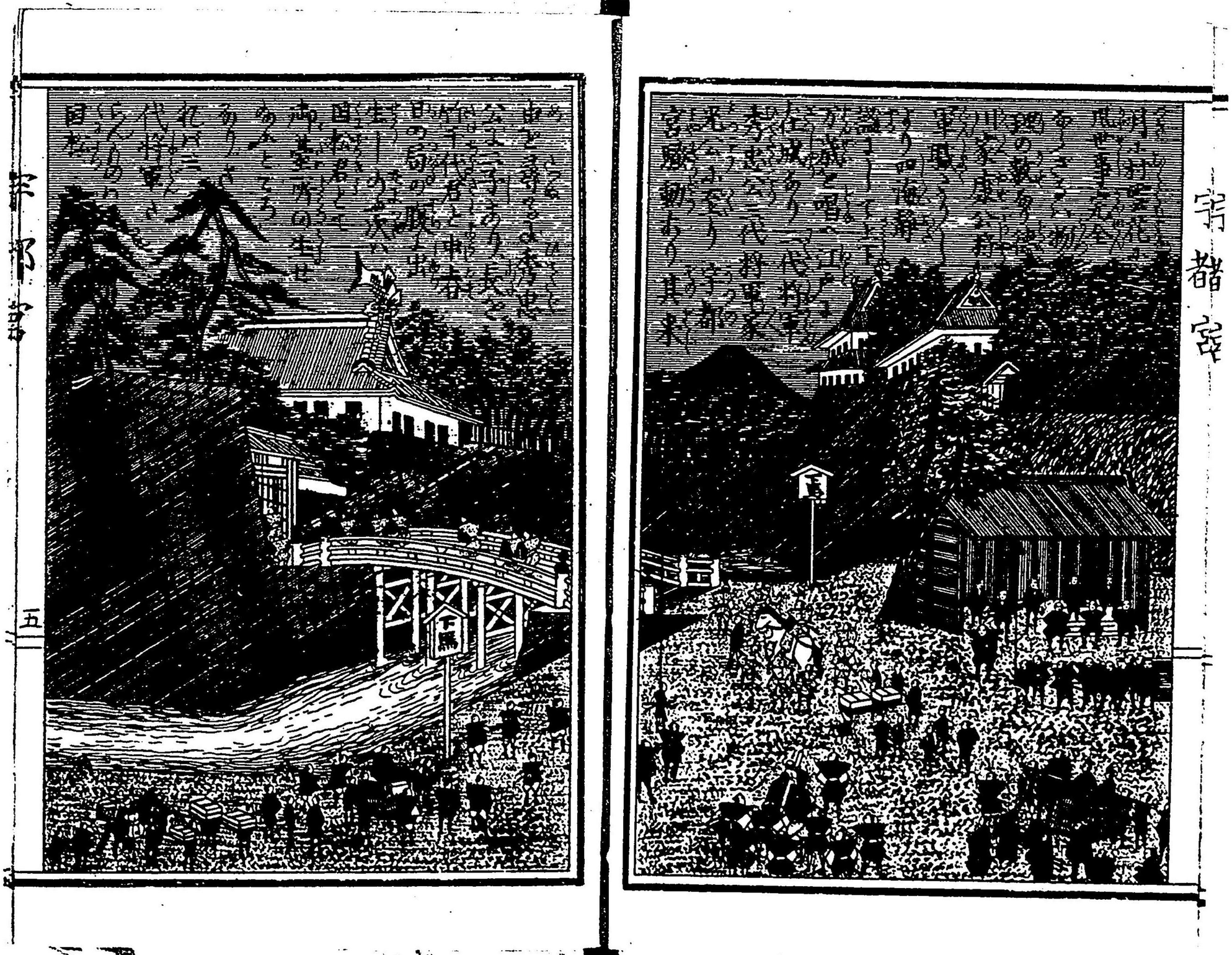
金壽堂梓


日本橋ヨリ日光迄街道
江戸
千住
草加
越ケ谷
大沢
粕カベ
杉戸
幸手
栗橋
中田
古

日光
鉢石
今石
大沢
徳次郎
野沢
宇都ノ宮
雀の宮
奥州道
石橋
小金井
新田
小山
間々田
野木
河


日光山全圖




下馬

明治の御代花の春風世事完全なるさまは物理の数なる徳川家康公将軍職より四海静謐にして上下が歳と唱へ江戸城なり二代将軍秀忠公三代将軍家光公より字都宮騒動あり其来由と尋ねるに秀忠公に三男あり長を代君と中を春日の局の腹に出生の次を国松君とて御愛子の生せなりとてあれば三代将軍さんの国松

君をはじめ人々かりひ
あつり赤
れしぐ
家康公
の御意
よりて竹
千代君御
家督
のさだめて補佐よハ酒井
左兵衛尉家次土井大炊頭
利勝安藤對馬守重信の
三傑なり

君のしんと人々かのひあつて上へうれしくも家康公の御意によりて竹千代君御家督のさだまつて補佐ハ酒井左衛門尉家次土井大炊頭利勝安藤對馬守重信の三傑なり国松君ハ

此君聰明叡智ハ

又さりとて後見の西土等のこのきこと

本多上野介正純平岩主計頭親吉

家光公

駿府の城へ見まいと人後

西

そ正妻の御腹ゑり将軍さうんゑ家光公御代ーくしゆ本意ゑりね何らを家光公を廃ーて忠長公ゑ御家督せむゑと不良の心を起ーけるゑを

けれゆくて上野介正純ハ江戸へ遣き秀忠公の御機嫌を伺ひ且秀乃長公の御発明を賞讃ーて武将

の徳とそ
ゝ
あ
ゝ
申
述御家
督議り
ぬ
ん
こ
と
あ
と
を
御進
め申ふ素
ゝ
り御寵
愛の御子
の事ゐれば
いろ〳〵思惟

置んとの御意ゐれば上野介心中よ
ろこびこれ御前退出して
駿府へ帰りて同心の面々へ
りのぐさり互に悦び吉左右を
待居らる秀忠公も忠長殿の
発明ゐるを聞ありて御家督
御譲替まゐ〳〵思せらるゝ一旦家光
公へ定めらんとゝゐれば今更廃
さん事もゐりぐ〳〵
ゝ老中共の意見もあ
らんと井伊掃部頭を召さ
れ本多正純を進め申せ趣を
以て徳ある方へ家督を議り

の徳とそ
るべくあるべし
申
述御家
督譲り
あらんこ
とあるべ
と御進
め申さ
より御寵
愛の御子
の事なれば
いろいろ思惟

申さ
ばさやうの
やと御ゝ
ぞあり
ければ掃

しイ置んゝの御意なれば上野介心中ゑ
悦び去ぬるとりと御前退出して
駿府へ帰りて同心の面々へ
のぐるり互ゑ悦び吉左右を
待居さる秀忠公ゑ忠長殿の
発明なるゝを御聞ありて御家督
御譲替まゐらせ思せらるゝ一日家光
公へ定めらんしゝこれば今更廃
さん事もなりがたしとも
ゝ老中共の意見もか
らんと井伊掃部頭を召さ
れ未多正純を進め申サー趣を承り
以て徳ある方へ家督を譲り
命の知
く大切
の天下
の御大
任を
ゆづら
ざるべき
義み
はいかに
の徳ゝ
ぶべきゝ

よひへくも大御所の御遺言よりも大切の評定の為に代の人
保彦左エ門と相談せよとの仰せなれば即時
ゝるべくゝゝあるゝよりて
治されゝは彦左エ門は早
速登城の上御前ゝ伺候
てゝるゝよ直孝申ゝ曰て御辺
も知るごとゝ御家督ハ家光公ゝ御定めの所天下の大任を
ゝづる大事のゝゝゝゝゝ評
議ゝゝんゝ思召貴殿と御
めゝゝよゝゝ申せバ彦左衛門
陳るゝゝ徳川の御所目ハ家光公
と立るゝゝ天下の諸侯皆知る所

り大御所ゝもその御ゝゝゝゝ御他界あ
りゝ事ゝゝりゝゝゝゝゝ子ゝ見るゝゝ
親ゝゝゝゝゝゝゝ申せバ君の

又ひへども大御所の御遺言又も大切の評定みな必我名代の大久保彦左エ門又相談せよとの仰せなれば被れを召しして御らんしらるべしとあるゆより即時彦左エ門を召されしは彦左エ門い早速登城の上御前ゆ伺候しとあるゆ直孝申ゆり兼て御辺も知るごとく御家督い家光公ゆ御定めの所天下の大任なゆづる大事のことゆへいろいろ評議あるべんと思召貴殿と御めしゆゆゆ申せば彦左衛門陳るゆり徳川の御跡目い家光公と立るゆ天下の諸侯皆知る所なり

御は次第ゆ成れるべけれども家光公なれば諸人の知所なれば

り大御所みもその御ことゆゆ御他界あり事ゆり去りしゆ子ゆ見ることゆ親ゆしらるべしと申せば吾の

みなれば駿河殿忠長卿みもあれば其旨諸侯へ更に無言なれば

是いかと申せば御他

御使者多り
但冥途へ至り
依脇の沙汰を
申さんもそろり
〻〻てれよ依て
目付と一工駿河
ぞのみ付まらら

界大御所へ御告知せの御使者ハ甚ダ困難ありしの

御使者ハ甚ダ困難ありしの但宜敷ハ平生依賂の沙汰を申さんもなり

ゞ〜これ依て目付として駿河しゞの付まりゝ

ゞ〜きこえ家光公御家督あきまて家老計頭本多上野介将軍を害せんと計り其策ハ

せるものゝ中より西三人さ〜そへいれてあるゝへ〜と試上おけるゝ茲ニ将軍家光

酒井左エ門土井大炊頭安藤但馬守此三人ハ大御所在世の際仏千代君と王将と仕立奉るべ〜と此者とつけ置れさり〜ニ今更忠長殿御家督とあらハ此三人の教道空〜きこえ家光公御家督あきまて面目を失ふのゝうち存命まへきあらを是冥土へのうん

うや〳〵と互ニ手の平へ
書てひらき見るゝ荷合せ
しゐべ大ニ悦び忠長公へ
内々言上〳〵熟て用意
ある様ニたゝらひ申
さん上野介ハ忠長卿
へ御暇を乞ひ駿府
を発足〳〵江戸へ
来り将軍家光
公へ拜謁〳〵御社
参の儀と感
賞奉り附
てハ字

与太郎

都宮
城へ御
宿願
〳〵御
許可あ
けれバ上
野介ハ大
ゐ悦び本
国さして
帰城の上
将軍家ち
害をべき
計畧を

〳〵と互ひ手の平へ書てひらき見るまゝ符合せしかば大ひに悦び忠長公へ内々言上〳〵兼て用意ある様ゑもちろん申さん上野介へ忠長卿へ御暇を乞ひ駿府を発足し江戸へ来り将軍家光公へ拝謁し御社参の儀を感賞奉り附てハ字

■考るに容易ことゝ思ひ事成るまじと器量あるゑ大工と十人撰び密に結と申付成功の上に莫大の御恩賞を賜ふべき旨を仰て繪圖面ふ隨ひ建築をなすべしとその工らん新さ

都宮城へ御宿願し御許可あれハ上野介ハ大ひに悦び本国さして帰城の上将軍家ゑ害をなべき計畧を

※室三間四方の建

※其中ゑ湯殿を方一丈ゑ横へ

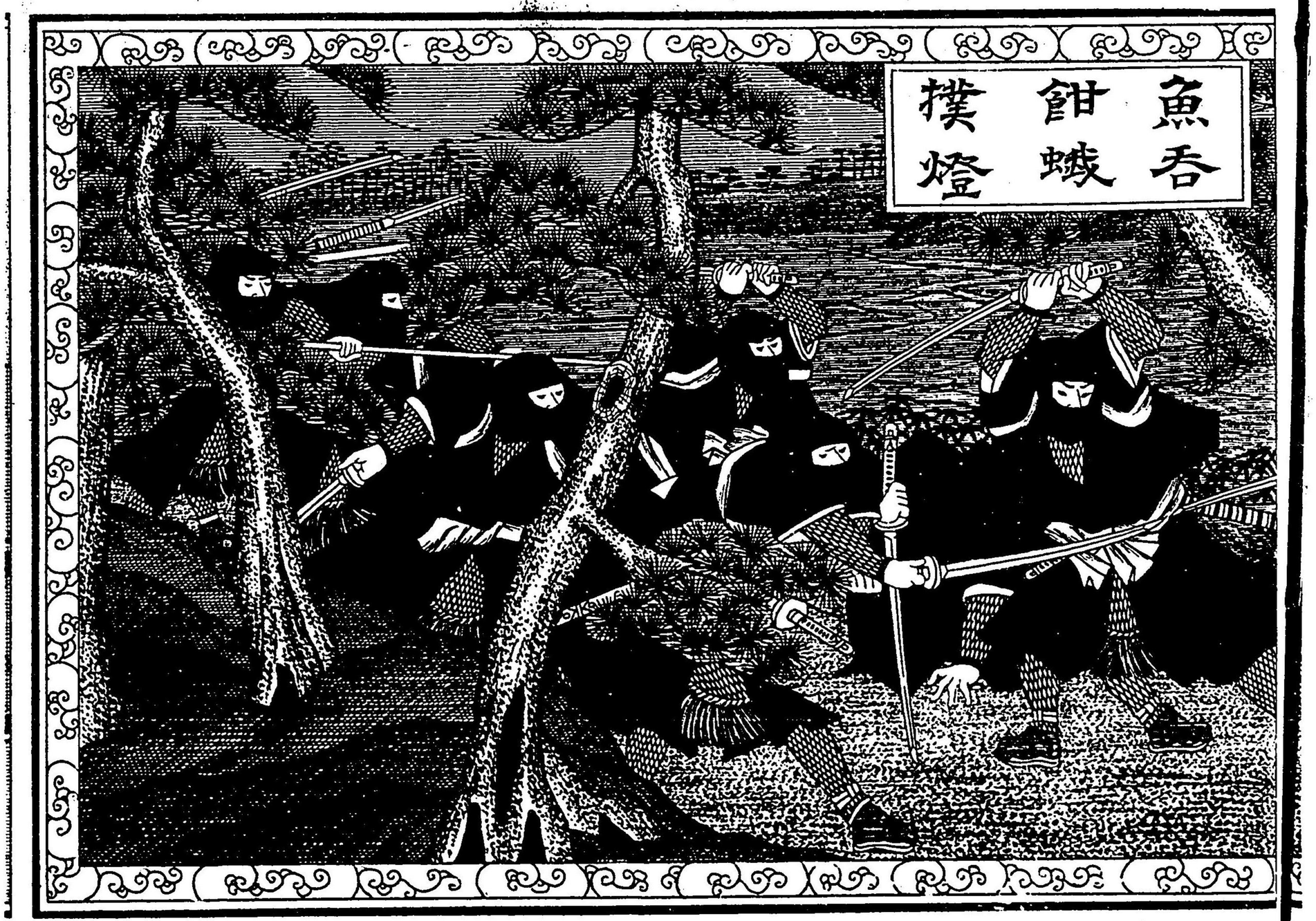
浴湯の時
四方の縄を切て
落し
押殺せの工さるり故ゑ
十人の大工ハ普請中城内ゑ留
置外出をゆるさをさて大工の中ゑ
瀬も絶て
うゝゝゝ与
太郎地へ
ゐて城中
をたのび
出辛くも
庄やゝえ
至り久し
ゝりあて
娘ゑ逢ひ
釣天井の
普請の

与太郎といふものあり宇都宮近
方塩屋村といふ所の人ゑて美貌なり
麦ゑ同村の庄屋藤左エ門といふ人の
福有のものゆて數寄屋を建る時
与太郎ゑ言付し其普請中
家の娘ゑ戀慕されつゝ
中とありしが
逢●
犯物
語り
山計
野成
就の
上ハ大
金を
まだ

其上ニ釣天井ヲ拵ヘ大餐石を集め置将軍浴湯の時四方の縄を切て落し押殺その工をなり故ニ十人の大工ハ普請中城内ニ留置外出をゆるさざさて大工の中ニ

瀬も絶てあり〻ゞ与太郎堪へるゝて城中を志めび出辛くも左やうゝえ至り久し

与太郎といつものあり宇都宮近方塩屋村といふ所の人ゆて美貌ゆり美ニ同村の庄屋藤左エ門といふものゆ福有のものゆて數寄屋を建る時此与太郎ゆ言付し其普請中此家の娘ゆ戀慕されつひニとりるき中となりしが此ゆんニ付き逢


魚吞
鉗餓
撲燈

るれがそのと知れ立派の身分とあり聟みるるう嫁を貰ふをでーあどくるりつくして夜明ぐるまで帰り けるを却て説城内みの家老川村叡負あるもの大工の部屋を見廻るみ九人あるでい居らぬ

一人い何方へ行ト歩と尋ねるる皆々い驚きくくさんもあ〜実い与太郎事外出を聞て此処正直のあ〜こそ〜みて取たらひ出し遣しけへども迫付帰り申べく付何卒穏便ま願ひ奉るとまた言してあり川村いもも咎めず

庄屋藤左エ門

されバその々と兒ハ立派の身分となり聟ふなるゝ娘ふ貫ふなもアふどゝなりつくして夜明がさふぞ帰りけるが立て説城内ふて家老川村靫負なるもの大工の部屋を見廻るふ九人なくでハ居らぬ也

●立去りける夜明て又来り見るふ十人揃ひ居るふ川村ハ早々主人の前へ出この顛末を陳べけるふ主人ハ聞てそれハ一大事あり蟻の穴より堤の崩るゝとハ此事あり速ふ十人を討捨べしと無ざんふも討果せり扨も庄屋の娘ハ与太郎

一人ハ何方へ行しやと尋るふ皆々ハ驚きさくさんざうもなく実ハ与太郎事外出を望ミ此処正直かの者ゝなしなて取をくらひ出し遣しけれども追付帰り申べく何卒穏便ふ願ひ奉ると只ど言してありしが川村ハ少しも咎めぞ●

ゝが殺されしことを聞てなげくあげき此間の森りの

ぐうりの釣天井の細工の事をこまぐと書置き残しあの世へ添ひ遂んと自殺せしよふ親のあげき一通あらぐ形のごとくのべ送りとさ猶書置をくり返し讀よ釣天井の一義いふも不審あり殊ハ将軍家御山陵との噂あれば是大事なるべしと覚り悟と極め御先供なる井伊掃部頭の休ミ所へ

所へ来り与見あり大ふ驚きの一謀を儲り最将軍家も御着き面々宇都宮宿繰込

ぐりの釣天井の細工の事くどくどこまぐと書置よ残りあの世ゆて添ひ遂んと自殺せしゆゑ親のあげき一ぶぜ形のこくのべ送り置をくり返し讀よ釣天井の一義いろゆも不審あり殊に将軍家御止宿との噂あれば是一大事なるべしと覚し悟と極め御先供なる井伊掃部頭の休こ所よ

外九人の大工と殺害され末釣天井宮織の事を委しく認め書付を差出し掃部頭

一見あり大驚き一が一の謀を備り最早将軍家面々守護宿繰込

将軍家光公

板倉内膳

将軍家光公
上るに大御所
秀忠公御不例甚さ
重らせ給へり御存命
旦夕にあり疾々
御引返しあるべ
しと右の書翰を

又あり れば本多上野介正
純御出迎ひとして掃部頭が
本陣に来る互に丁寧に挨拶あり
同道して将軍家
の御出迎ひ
に出行
る折柄
御乗物
に近付
宇都宮へ
今二里でう
して着御
の所江戸の方
板倉内膳
早打
の騎馬駆
来り
御老中よ
りの書翰
を呈す板倉
内膳正重昌御祭
物みまして是を讀み
井伊掃部頭
来り是御
大切の儀故
早速御引
返しあるべ
し御
社参の
御名代
ハ板倉
内膳
正へ
仰付
らるべし

かくて越中守へ将軍の影武者

家光公

とありて石橋宿へ止り将軍へ越中守が案物ゐて江戸をさして夜中よりいそうせさまし〳〵へ陸尺とも精力尽て役ゐさる者ゐ〳〵八右エ門追手の来るゝと少しき心もゐ〳〵諸人を駈立〳〵急げとも一同労れて最早一人も

石川八右エ門

将軍の還御あり

早上江戸城へぞ到着せり然るゝ大手の御門内へ大音みよ

役ゐさる者れい八右エ門八ちさ自ら案物の棒を一人ゐて

せざるもうどーき返
谷もあけれがさんがこ
そこと城中のやうへ
と探り明らろ帰
登城して本多
が結構明白あ
る：言上申
将軍老臣ら呂
て本多が
企一存よ
あるまじ定
長本人有べ
仰ありて夫々

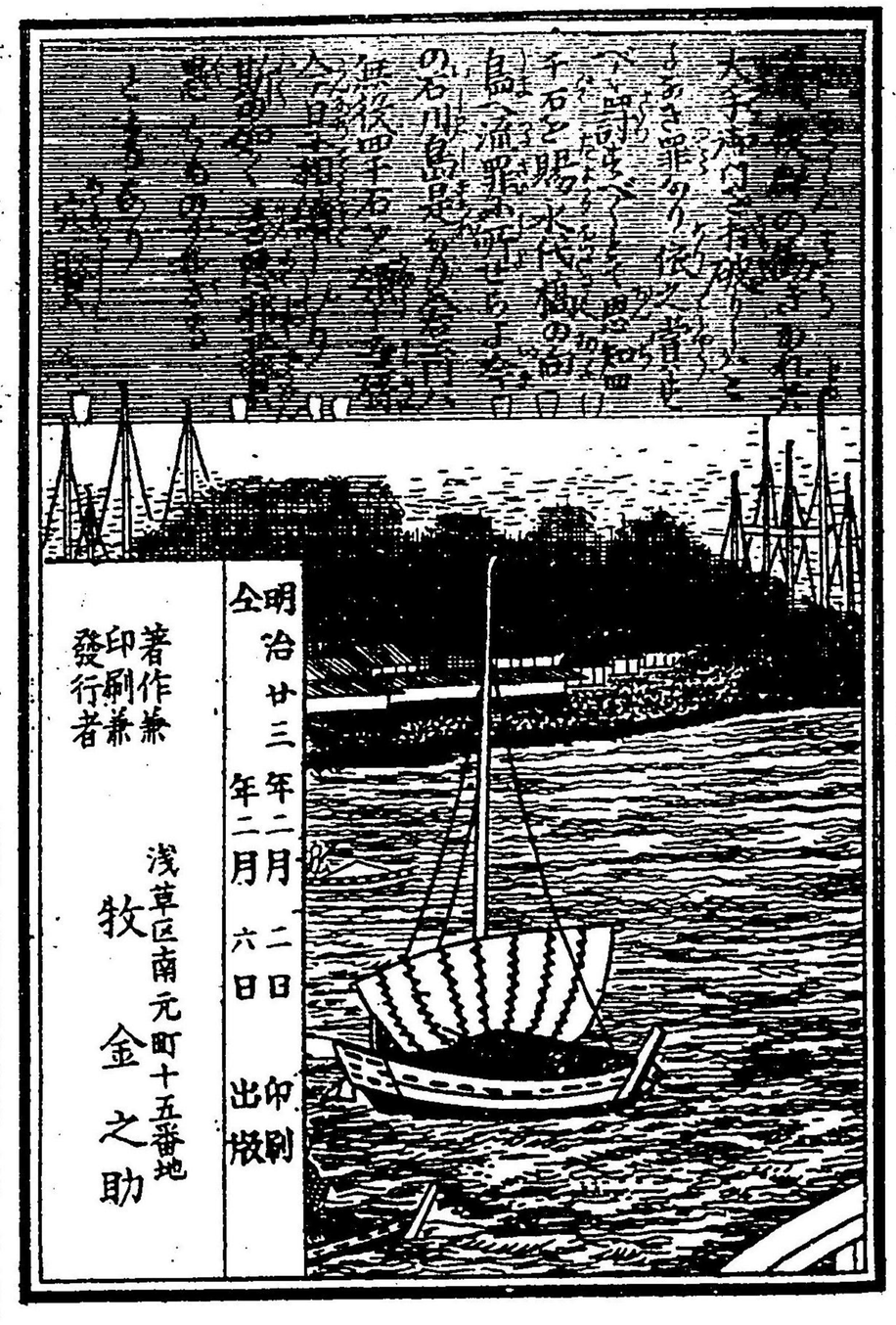
御門を開うんよ〜
いへ〜の夜中らひ不意の
事故決て開くまじ〜れい無物の棒と
板とり扉と打破る勢ひあれい御門
番い大ひふ驚さんうの乱暴あ〜べ鉄
砲みて打果べ〜と申さるゝ夫みて
将軍は御怪我ありてい大変ありと袁
御門へ廻り潜〜将軍御城へ入御ありて御家
門方へも拝謁と給ひ井伊がうひと
夫々御物語あり却て説板倉内膳正
い日光への御名代を務め帰り道宇都
宮へ至り本多ふ面會ゆ〜同伴出府を申
し大久
保彦左
エ門い御前ふ進〜て
申ゆり家光公御家
前忠
長郷
の御
家

詳議あり

本多上野介

本多上野介

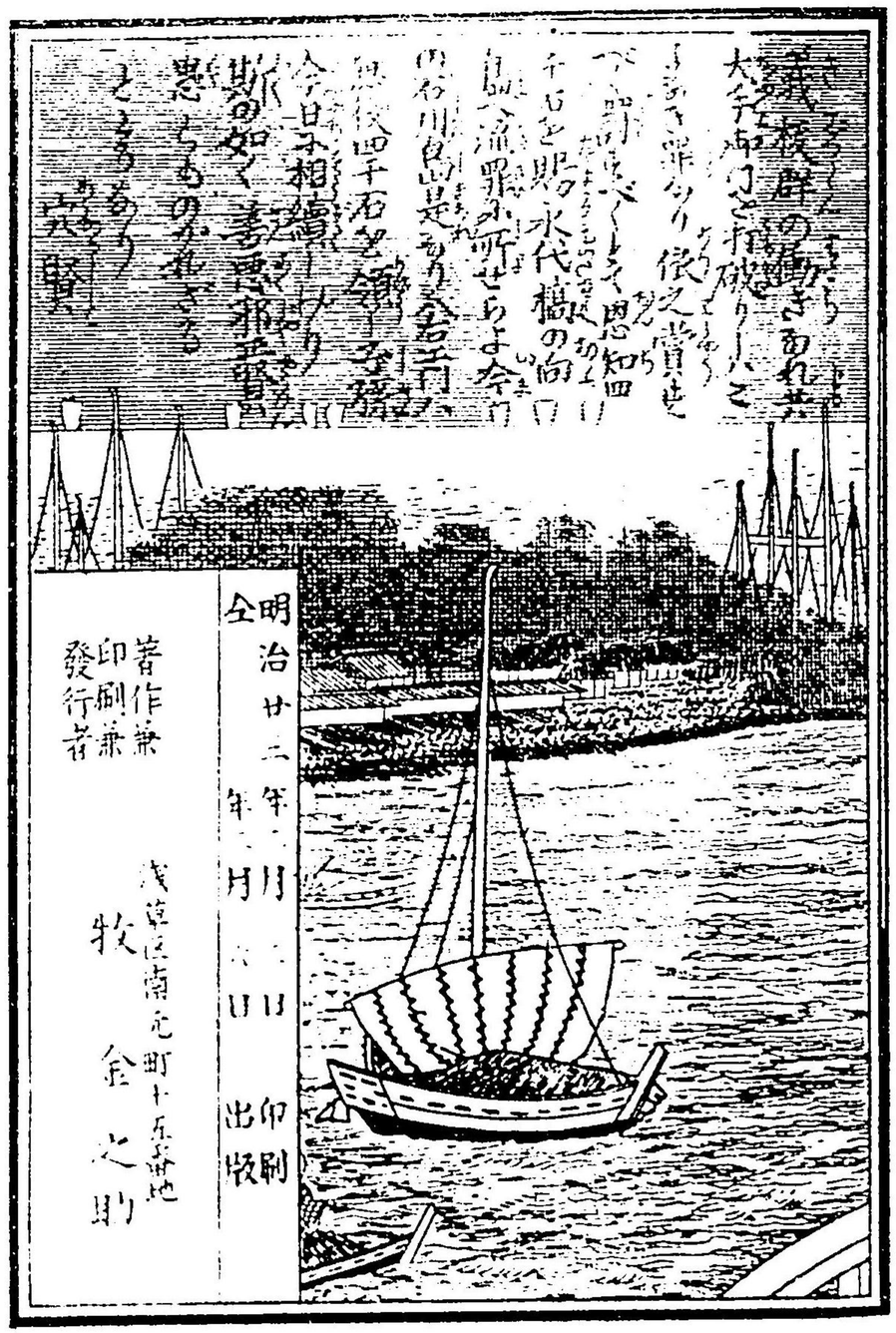
宇都宮



明治廿三年二月二日印刷
全年二月六日出版

著作兼印刷兼發行者
浅草区南元町十五番地
牧金之助

宇都宮



明治廿二年一月一日印刷
全　年　月　日出版

著作兼印刷兼發行者　牧金之助
浅草区南元町十五番地

宇都乃宮騒動記

特60
138

091938-000-6

特60-138

宇都乃宮騒動記

牧　金之助／編

M23

DBP-0052